
黒白国家

洒流奇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒白国家

【Nコード】

N5970T

【作者名】

洒流奇

【あらすじ】

ここはとある王国『黒白蘭国』のお話。

この国は主に2つの都市で区切られています。

黒蘭市と白蘭市。

白市はまるで夢のような都市。

何処でもカメラで監視されていて犯罪が全く無い国。民主は皆笑顔の日々。

対して黒市は、

犯罪はお金を払うか死ぬまで働けば許される都市。

例えば、殺人を犯す前に裁判所に通告して、お金を貢げば罪が和らぐか、無罪という感じですよ。
そんな黒蘭で良く襲われる少女が

(続きは文章を)

笑顔の採点者

放課後の私立の中学生の三年のクラスに
D組と書かれた教室の中には少年三人、少女二人居た。
少年の中心に居る少女の手には学校とは場違いなモノが握られてい
た。

「何ですかー？」

少年少女に向かい合う形で立っている少女。

少女は肩まである黒髪を弄っていた。

まるで現在の状況を理解していない様なトーンで話す。

「もう我慢ならないわ。もう裁判所には連絡したしね」

（裁判所に連絡したって事は）

（もうウチを殺す気満々なのか）

（バツかだな）

少女は髪に向けていた視線を目の前の少女達に移して

「裁判所は何千万円で承諾したんですか？」

黒くて丸い瞳を細めた。

「三千万円」

（中々高いねえ。）

（私の価値は三千万なんて、）

(感動)

「正当防衛ですよね？」

頭を傾げて手を背中に有るラケットバックに添えて、
一瞬で中身のラケットを取り出す。

「例え正当防衛でも殺したら貴方も牢獄で死ぬまで働く事になるわよ？この国は金でしか動かないんだから」

ニツコリと笑って少女は少年達に顎で命じる。
ラケットを握ってる少女を抑えろと。
少年達は力無く頷いて少女の周りを取り囲む。

「ですね、ですね」

コクコク頷いて、

少女はラケットを少年達の体を

野球ボールの如く、

飛ばした。

「！」

少女は目を見開く。

ガラガラッと机と共に倒れた少年達の体は痙攣している。

「なっ」

少年達に向けていた視線を自分の敵が居る目の前に向けた時には遅かった。

バタツと少女の体が床に倒れた。

「はまじかある芭磨螺霞薰、不合格」

倒れた少女の後ろに居た少女は笑った。

屈託のない笑顔。

「勿論その他の協力者、ねすみとつき鼠砥冬祈、さわなみかはら澤波華原、たまなかあるく珠那賀歩狗も不合格」

少女はラケットの血をスカートのポケットから出したハンカチで拭う。

「お金だけの世界は、」

ラケットバックにラケットを入れて

「力がなきゃ死ぬんだよ」

笑った。

「この都市、」

教室の外に足を運んで、

「黒市ではね」

ピシヤリとドアを閉めた。

教室に血と負傷した何人かの体だけが残った。

「秋馬あきまちゃん！！」

秋馬と呼ばれた少女は振り返る。

「…知虎ちこ溜るどうしたの？」

「どっどっしたのじゃないよ！」

頬に一瞬空気を溜めて膨らせて見せる少女。

貴方のファンです

「昨日の奴見たよ！スッゴク格好良かった！」

「…カメラ動（後書きで説明します）め…」

「まぢでカツコイい〜！あんな一瞬で敵ぜ〜んぶ倒しちゃって！」

「アーハイハイ、カツコヨカッタネーカツコヨカッタネー」

機械的な言葉を放つ秋馬を見て知虎瑠は更に興奮する。

「本当に本当に凄かったよ！本当に本当に…」

「ハイハイ分かったからさ…後二十分後に学校始まるんだからさ、
落ち着こうよ…」

溜息を薄い唇から吐き出した秋馬に知虎瑠は可愛らしく頭を傾げる。

「学校…？何ソレおいしいの？」

「ヴッ！」

思わずぶっ倒れそうになる秋馬。

天然美少女知虎瑠の愛らしい動きはもうこの都市では有名なのだ。
男なんて…ねっ？

「だっ大丈夫！？何かあったの!？」

更に顔を覗き込もうとする知虎瑠に秋馬は真面目に倒れそうになる。

「だっ…大丈夫だから、気にしないで…」

手で知虎瑠を制してその場で深呼吸を行う秋馬。
心臓の鼓動がある程度落ち着いたので歩き出す。

「それにしても知虎瑠近付かない方が良くないじゃない？」

「何で？」

「そりゃ勿論、」

足を止める。

「人気者だからさっ」

空を仰ぐように広げられた手の先には
物騒な物を握った男達が居た。

「ねえ知虎瑠」

「何？」

肩に掛けてあるラケットバックから取り出された真っ黒な不気味な
ラケットは秋馬の手に収まる。

「知虎瑠にとってウチは何？」

「そんなの決まってるよ」

秋馬に向けて最高の笑顔を贈る。

「ファンだよ」

「そりゃ良かった」

秋馬は笑顔で返すと知虎瑠に背を向けて、男達に向かった。

スカートである事も忘れている知虎瑠は地べたに座っていた。知虎瑠の瞳には秋馬しか捉えられていなかった。

彼女の動きしか知虎瑠の脳内に刻まれない。

彼女の事しか考えていない。

彼女がその重大さを理解するのはずっとずっと先である。

きっかり一分後に全ての男達が真っ赤に染まっていた。だがまだ生きているらしく小刻みに痙攣している。

「ねえ秋馬ちゃん」

男達の中心に居る秋馬の制服は全く血が付いていない。

秋馬はポケットからハンカチを取り出してラケットの血を拭う。拭っているハンカチが毎回同じなのかハンカチは所々赤くなっていた。

「もし私が人質にされて貴方の命と交換しろって言われたら？」

「そりゃ勿論、」

「自分の命優先」

そして

少女達は笑った。

貴方のファンです (後書き)

カメラ動画は二コ動的なノリです。

白蘭のホーは1メートルに1個カメラが設置されてて、黒蘭は劣り
ますが幾つか設置されています。

そのムービーがPCで見る事が出来、
そのサイトをカメラ動画と言います。

最後の安らぎのお昼休み。そして最悪のお昼休み（前書き）

すいません。

凄く遅れました…

読んでくれたらありがとうございます…。

最後の安らぎのお昼休み。そして最悪のお昼休み

(…)

(何で…)

(呼ばれないんだ?)

「ほおわい…」

「秋馬ちゃん…? 何故って?」

ほおわいとは、英語でWhyです。

「…昨日殺ったじゃん?」

「あの馬鹿集団?」

「それぞれ。集団殺ったら学校からちよーと言われるんだよ。殺った人間に金が沢山入るから」

「秋馬ちゃん何円裁判所から貰ったの?」

「昨日前払いで百万円来たよ」

頬杖をついて当たり前のような顔した秋馬自分の席の前で立っている知虎瑠に上目遣い。

知虎瑠は大きな瞳をパチクリさせてから、

「もう一回言ってくれる?」

「んっ？百万円」

知虎瑠は人差し指を立たせてもう一回言う様に促す。

「百万円」

知虎瑠はととと固まる。

まるで美術の作品の如く綺麗に。

「零が四個多いよ？」

数秒後動けるようになった知虎瑠はぎこちない笑みを浮かべて言う。

「それって一円って事？ねえウチの命安くないですか？ねえっ？」

「じゃあ十円？」

「いやいやいやいや！おかしいよね！？ウチの命安すぎだよね！？

どこのスーパーのセールですか！？もう半額以上割引ですけど！？」

「流石秋馬ちゃん…ツツコミも抜かりない」

「ねえ嬉しくないんですけど？なんか悲しいんですけど？」

最早漫才をやってる二人に近付く人影がやって来て

「痕消秋馬さんか？」

この都市に合ってる真っ黒なスーツを纏った男はニコリともせず機械的に言葉を紡いだ。

「どちら様で？」

「私 黒市秘密警察幹部第四前走後蟬、」

秋馬は知虎瑠に離れるように手を仰いだ。
知虎瑠はコクンと頷いて離れる。

「貴方に話が有ります」

「放課後で良いですか？お昼休みそろそろ終わるんで」

「いいえ。校長室に今すぐに」

「私のお気に入りも良いですか？」

椅子に掛けてあるラケットバックを握る。

「構いません。では 前を」

促された秋馬は歩む。

今日彼女の使命が
与えられてしまう。

残酷な人生の

幕開け。

四月十八日の正午十二時三十六分。

無畏一掃屋（前書き）

待ってくれた方は…

居ないですよね…

スイマセン。

遅くなりました。

無畏一掃屋

『校長室』と書いてある古びた看板が部屋の前に置いてあった。

(…まさかの看板?)

そんな事を気にしない前走は扉を叩いた。

コンコン

と小さな声が無音な廊下に響く。

数秒後、「どうぞ」としわがれた声が扉越しに響いた。

前走はゆっくり扉を開いた。

目で秋馬に入るように促す。

秋馬は「失礼します」と形だけの挨拶をして部屋に入る。

風が通る部屋に昔話に出てきそうな弱々しいお爺さんが上質な椅子に腰掛けていた。

秋馬の鼻に爽やかな木々の匂いが通る。

「君が 痕消秋馬君かい？」

しわがれた声に秋馬は頷く。

前走は秋馬の横を通り過ぎてお爺さん 校長の横に並んだ。

「頼みが有るんだが…良いかな？」

感情が読み取れない笑顔を秋馬に向ける校長。

秋馬は唾を呑んでからゆっくり言葉を吐いた。

「モノによります」

「『モノによります』、か」

校長はクスツと嘲るような笑みを浮かべた。

「残念だが君には拒否権は無い。分かっているだろう。この私が来た時点で」

自らの胸板に手を置いた前走を見て秋馬は

「そうかもしれないね」

笑った。

その笑みは別に他人を下に見るような笑みでは無い。だが、他人を下に見るような笑みでも有る。

「で、私への依頼は？」

「君には黒蘭の中の今宵町と闇雲区を担当したお巡りさんの者に
なってもらおうと思っっているんだよ」

「今宵町…と闇雲区…。黒蘭で最も土地代や物価が高い今宵町と犯罪者が絶えない闇雲区のお巡りさん…？このウチがあ！？」

秋馬は肩に掛けてあつた得物を取って

校長に向けた。

「馬鹿な事は言うな。大体ウチがそれをやって得は無い。拒否権が
あるなし有無は関係ない！」

怒りで声を震わせる。

「君は馬鹿なのかい？」

優しい声が秋馬の耳を届いた時には

世界が反転していた。

否、前走が秋馬を抑えていた。

「私一人だと君に殺されてしまうから秘密警察の方が居るんじゃないか」

「それに」と前置きを置いて、

「存在が罪そのものの君が何を言った所で何も変わらないのだよ」

「分かっているだろう」と呟いた最後の言葉は
秋馬の逆鱗に触れた。

「五月蠅い！！確かに望まれて生まれてきてないって自分でも知っている！！でも、だから、俺は黒蘭の方でひっそりと暮らしてたんだ！！ただ、逆恨みでウチを襲って来る奴が他の奴らより多いだけだ！！」

体を震わして上を睨む秋馬。

それを校長は

笑った。

「『他の奴らより多い』ね。はいはい。何で君は多いか知っている？それはね、君が強いからだよ？確かに秘密警察の方には負けるが、君には最強の遺伝子が有るだろう？だから、君は、襲われるんだよ」

秋馬は黙った。

「勿論、それなりに報酬とかは出す。あっー様言っとくけど君の新しい家は此処だから」

校長は椅子から立ち上がり、
秋馬の前でしゃがむと紙をヒラヒラと見せた。

「…何でコノ場所に」

そこは

今宵町だった。

「仕事場だからだけど？」

「その土地は凄く高いんだぞ！？それにウチ一人に3LDKは無いだろ！？」

「それに」と言葉を付け足して、

「もう用意されてるって事は最初からウチを…！」

校長は驚いたように目を見開いた。

「よく分かったねえ？そだよ。最初から君を狙ってたんだよ」

「何で!？」

噛みつくような勢いの秋馬を宥めるような柔らかかな口調で話す。

「君が強いからだよ。それに、前住んでいたアパートはボロいだろう？君はお金が何時盗まれるか落ち着かないだろう？」

「ああ因みに収入はこれ位で」と言いながら電卓を弄ってから秋馬に見せる。

有り得ない大金だった。

「命が無くなるかもしれせんから」

前走が付け加えるように言った。

「命が…？」

「当たり前だろう？だって悪い人達はお巡りさんとか嫌いだろうからねえ？だから強い人が必要なんじゃないか」

秋馬は口をポカンと開けた。

「まあ…家は爆弾を投げられても壊れない位丈夫だから安心してくれ」

「それと、もし用が有ったら此処に電話して下さい。此方からも貴

方に仕事を依頼する事も有りますから」

前走はそう言つと秋馬のポケットに紙を入れた。

「じゃあ…明日から頼むよ」

校長は再度笑つた。

「仕事名は　　—無畏—掃屋だから」
むごころいそや

秋馬の袖に何か書いてあるモノが付けられた。

無畏一掃屋（後書き）

無畏…：畏れが無い事。

という意味だそうなので。

因みに秋馬は結構短気です。

好き(前書き)

間違えてもう片方に入れちゃいました。

スイマセン

好き

「誰だ…？」

秋馬は呟いた。

今、秋馬が居るのはセメントで出来ている堅い堅い地面の上。そこでポツンと座って居た。周りには人が居ないのか空気が爽やかに流れる。

「誰なんだよ…」

秋馬は自分の腕元を見る。

『無畏一掃屋』と達筆な字が入ったモノが飾られている。

（あの校長が言っていた事…）

「おかしい、変だ」と小さく呟いて手元に有るラケットを握りしめる。

（私に最強の遺伝子が存在している事は 知らない筈）

（知った奴は私を襲って、）

（私は口外しないように体で教えた）

（なのに、）

（校長は知っていた）

（おかしすぎる）

「何でだ…？」

「なあにがつ？」

秋馬の耳に言葉が届いた。

「…誰っ!？」

秋馬はラケットを構えて相手と間を取る。

(心配が…)

(この私が気付かない奴は…)

(誰!?)

秋馬は前を睨んだ。

そこには

「どうしたの?そんな怖い顔して」

知虎瑠がいた。

心配そうに頭を傾げて、笑っていた。

「うっ…うっん。ちょっと驚いて」

秋馬は肩にかけてあるラケットバックにラケットを入れる。

その動作は自然な感じだが、気持ちぎこちなく見える。

「ところで秋馬ちゃん、さっきの何？」

知虎瑠は栗色のおさげを左右に揺らす。

秋馬は笑って答える。

「気にするな」

知虎瑠はふうん？と頭を傾げると「じゃあさっ」と言つと秋馬の腕元に手を添える。

「何コレ？」

「…肩書きかな？」

「肩書き？何て読むの？むいいちそうちゃあ？」

秋馬は再度口角を上げて答えた。

「むいっそうちゃ」

「じゃあさじゃあさっ、お昼どうだった？」

手をブンブン振って興奮した様子で話す知虎瑠を見て、

「最高だよ？」

ニツコリ笑った。

秋馬は歩き出す。

「何処に向かうのー？ウチらのアパートあっちじゃん」

秋馬とは正反対の方へ人差し指を向ける知虎瑠は秋馬の横に並ぶ。

「知虎瑠」

秋馬は小さく知虎瑠の名を呼ぶ。

「んっ？なあに」

知虎瑠は秋馬の腕に絡み付きながら元気な声で応える。

「私と関わるのはよしな」

知虎瑠は足を止めた。

秋馬の足も知虎瑠の絡まった手によって止まる。

「な…んで…？」

途切れ途切れの言葉が薄い知虎瑠の唇からゆっくり吐き出される。

秋馬は顔を俯かせながら言った。

「コノ私の肩書きがあんたに迷惑かけるかも…しれないから…」

自分の腕元に有るモノを恨めしそうに睨んで苦しそうに言葉を出した。

知虎瑠は何も言わない。

「だから、私とは」

「嫌だよ」

知虎瑠は秋馬の言葉を切り捨てて抱き付いた。

秋馬は目を見開く。

「私は、秋馬ちゃんが大好き。誰にも負けない自信有るよ。例えば私

は秋馬ちゃんに殺されても許せる。だって、私は秋馬ちゃんが好きなんだから」

『好き』と、何回も何回も、

言った。

「だから、私は秋馬ちゃんにずっとついて行く。私は、秋馬ちゃんから絶対に離れない」

秋馬はゆっくり知虎溜の細くて少しでも力を入れたら壊れそうな指を一つ一つ解いていく。

秋馬は、言った。

「馬鹿」

校長室の電話が甲高く鳴いた。

校長はゆっくり穏やかに電話を取った。

電話の主は小さく、聞こえるか聞こえないか位の声で校長の耳元に音を出す。

校長は良いだろうと呟いた。

そして電話を切る。

「面白いねえ」

校長は愉しそうに頭を上げた。

「誰とでも一緒に住むが良い。君が信用出来る人間なら、ね」

まるでゲームの攻略本を先に読んで全てが分かっているように、全てを理解したように、

愉しそうに愉しそうに笑った。

好き（後書き）

知虎瑠はレズではありませんので注意！

新ホーム(前書き)

スツゴい遅いですね…。

感想求めている&早く更新して欲しかったら書いて下さい。

新ホーム

「すっ…っい…」

「…感動」

二人の感嘆の声が出るのも不思議では無い。

二人は新ホームの前に立っていた。

周りの好奇心な目が軽く辛いと心で叫びながら此処に来た。

だが、好奇心な目は秋馬の腕に付いている肩書きですぐに尊敬の眼差しというか、「ありがたや」と手を摺り合わせるお婆さんなど。

秋馬は神の様に崇められていた。

だが、

そんな視線だけでは無い。

敵意が表れている視線も秋馬に突き刺さる。

「…秋馬ちゃん大丈夫？」

知虎瑠が心配するのも仕方がないのであった。

秋馬は笑って、

「平気」

と答えた。

そして二人は自分達の家に入ろうとする。

「『無畏一掃屋の肩書きを此処に当てて下さい』」

ドアを開けようとした秋馬に機械的な声がかかった。

秋馬は頭を傾げる。

知虎瑠が「コレじゃない？」と言われて腕元に有るのを黒いパネルに当てた。

「『名前は』」

「痕消秋馬」

「それと知虎瑠ですっ」

敬礼する知虎瑠に秋馬は「名字、名字」と言う。

知虎瑠は「言わなきゃ駄目？」と口をアヒル口にする。

「『了解しました。キー解除』」

次の瞬間カチツとドアからする。

「『おお〜！』」と感動する二人は家に入った。
ドアが閉まるとカチツと再度音がした。

感動した二人だが、目の前の光景に頭を傾げた。

また前にドアがあった。

ドアとドアの間は2メートル位しか無い。

「…どうすれば良いんだ？」

「…分かんない」

二人が頭を悩ましていると女の機械的な声が小さなスペースに響い

た。

「『秋馬様と知虎瑠様ですね』」

「はいっ…」「はあ…」

二人の曖昧な声に「『声紋確保』」と言う声が返された。

知虎瑠が頭を横に振ってみるとさっきあった物と同じ黒いパネルが有った。

「『パネルに手の平を当てて下さい』」

秋馬が最初に手を当てた。

ピロリンツと可愛い音がすると、「『次どうぞ』」と言われたので知虎瑠が手の平を当てた。

「『キー解除』」

音声と同時に扉がカチツと音になる。そこに入ってまたカチツと音した。

「ねえ…」

秋馬の声に知虎瑠は笑って答えた。

「…ドア何個有るんだろうね？」

彼女達の視線の先には
ドアが。

「『このパネルの所に目を近付けて下さい』」

「これで終わりだよねえ？」と秋馬が苦笑いすると知虎瑠は「さあ…」曖昧に答えた。

秋馬は言うとおりにすると「『次どうぞ』」と言われ、知虎瑠は言われたとおりにこなす。

カチツと音がすると扉が開いて彼女達が入ったらカチツと音して閉まった。

目の前には普通に玄関があった。

「やっとだ…」

秋馬の疲れた声に知虎瑠は勢いよく頷く。

二人は靴を脱ぐとリビングに入った。

「広っ…」

「…3LDKだっけ？」

「…多分」

知虎瑠の問いに秋馬は頭を傾げながら頷く事しか出来なかった。

リビングだけで十何畳位あった。

台所も最先端の物。

テレビも彼女達の家にあるものの三倍位はある。

何故か窓は5重位あって分厚い。

どうやって空気の入れ替えを…と何故かそこを疑問に感じた秋馬は辺りを見回す。

冷暖房は完全装備、床暖房もあるみたいだ。

色々なスイッチが有る中で『空気入れ替え』と言うボタンが有った。

ついつい誘惑で秋馬は押した。
ポチツと音がすると自分達のちょうど居る場所の床がウイインと叫んだ。

はっ？と秋馬と知虎瑠が耳を疑っていると言風が下から勢いよく吹き付けた。

二人は今制服なのでスカートがお腹に密着する位捲れた。
お互いが唾然としていると再度ウイインと言風がなる。

言風が少しづつ無くなって最終的にスカートがゆっくり元の形に戻った。

「空気が…爽やかだね…」

知虎瑠の言葉に秋馬は頷いた。

二人は二階にあがる。

「あつ私の荷物」

知虎瑠が何時の間にか配置されてる荷物を見回した。

知虎瑠が以前欲しがっていた可愛いお人形さんも綺麗に並べられている。

「…次行こっか」

秋馬の言葉に知虎瑠は嬉しそうに笑った。

三階に到着したら今度は秋馬が反応した。

「…完璧な配置だ」

秋馬は荷物の置き場所にそれなりのこだわりがあった。
だが、
彼女のこだわり 彼女の思ってたとおりに置いてある。
それに、

「グリップとかラケットのネットを張り替える道具もある…」

そう、彼女が前々から欲しがっていた道具だった。
彼女の頬が興奮により赤くなっていく。

「四階行ってみよ？」

知虎溜の言葉に秋馬は嬉しそうに頷いた。

四階には、
端に金庫が二つと、筋トレ道具などが混雑した。

「…凄い」

「だね…」

もう言葉を失う二人。
完璧な程機階が揃っており、一番置くには風呂が有った。
つまり此処で運動した後にはシャワーがすぐに浴びれるという事だ。

「あれっ…?」

「どうしたの秋馬ちゃん？」

「凄い嚴重だけどまだ階段が有る…」

「行ってみる？」

二人はニヒツと楽しそうに笑って階段を駆け上がった。

「…屋上」

「見て…洗濯場所…」

そこには屋根付きの屋上があった。
物干し棹が鋼鉄で出来てある。

「完璧だ…」

秋馬の言葉に知虎溜は大きく頷いた。

新ホーム（後書き）

因みにトイレは階段の下に全て設置されています。

買い物と暇つぶし（前書き）

長い目で見て頂けると嬉しい作品です。

暇だったらまた投稿しますが、してほしかったら感想お願いします。

買い物と暇つぶし

二人はルンルン気分以前住んでいたアパートの近くのデパートに向かう。

デパートの中に入り、食品売場へ。
籠を取って食べたいモノを次々へと放りこむ。

「秋馬ちゃん！」

「何？」

秋馬の怠そうな声に知虎瑠は気にせず「あれっ！あれっ！」と指を指した。

「あれえ？」

秋馬は知虎瑠の指した先をミルク飴を入れつつ見た。

「…」

秋馬は「はあ」と分かりやすく溜息を吐いた。

「買っていい!?!」

目をキラキラッと無邪気な子供のような知虎瑠はソレを握った。
ソレは

「ぬいぐるみが欲しいの？」

「ただのぬいぐるみじゃないよ！ティッシュ箱をくるむ的な！」

ハキハキした知虎瑠に秋馬は再度溜息。

「はいはい……」

「買って！」

「…良いよ」

押し負けた秋馬は知虎瑠のを籠に入れた。

数分後、秋馬達はレジに並ぶ。

「5365円です」

営業スマイルで秋馬達を迎え入れた。

さり気にお金を要求。

「はい。ついでにアレも」

福沢諭吉を靡かせた秋馬は籠に視線を移す。

「はいっ！八千円です！」

紙と近くのお菓子を取り、従業員は福沢諭吉を受け取った。

「二千円のお釣りで。また“来週”のお買い物楽しみにしてます」

秋馬は籠を取ると袋に詰めていき、籠置き場にポイツと籠を投げた。周りの客は「えっ？」と驚きの声を出した。籠は吸い込まれるように置き場に美しく着地。

「ねえ…秋馬ちゃん？」

「何？」

「さっきのは…？」

「サービスしてもらってんの」

秋馬は携帯で時間を確認すると「荷物持って」と知虎瑠に袋を突き出した。

「ハイハイ」

秋馬は沢山の袋を握った。

「じゃあ行ってらっしゃーい。私帰ってるね？」

「了解」

秋馬は知虎瑠の頭を撫でると走った。

知虎瑠も家へ走る。

巻き添えを喰わないように。

「その方々」

秋馬はラケットバックから何時ものラケットを取り出した。

「何を？」

「はっ？普通のお友達との会話だよ」

三人の男達はいやらしい笑みを浮かべ振り返った。
三人は一人の少年を囲んでいた。

「恐喝ですか？」

「違えよ。ただのお小遣い」

「そうそう」

「なあ？」

一人の男が少年の肩を握る。

少年は涙を貯めながら小刻みに震えるだけだった。

少年の鞆がミキツと悲鳴をあげた。

「ねえ。貴方達、そんな奴よりウチの方が持つてるけど？」

秋馬は懐から札を出した。
十枚ほど。

男達の目が変わる。

男達は頷くと秋馬を囲む。

少年はソレを確認すると猛ダッシュして逃亡。

「ぐはっ……」

無様に血を吐く男達。

「大丈夫ですか？」と秋馬は一人の男の腹に乗った。

「ねえっ？ウチこれから『無畏一掃屋』になるんですよ。此処担当地域外ですけど、平気ですかね？」

何故自分達がこうなっているか懸命に考えている男にはそんな事を考える余裕などない。

だが、秋馬は平然と気にせず話す。

「一様校長には連絡したんで、多分平気かなあ？給料出なきゃ困るのに。無駄労働だよまあ」

ぷくつと頬を膨らませると秋馬は笑った。

「まあ暇つぶしだし」

秋馬は携帯で指を踊らせると立ち上がった。

「またやったら、貴方達、」

秋馬は男達を見下す。

「死にますから」

秋馬は男達を睨む。

男達は震えた。

そして、後悔した。

化け物に喧嘩を売った事を。

化け物は、闊歩する。

街中を。

待って、待たせて（前書き）

今回は早いでーすね。

短いすよー。

待って、待たせて

「君は意外と仕事熱心なんだね」

校長の落ち着いた声に秋馬は笑いもせず、手の中のラケットを弄ぶ。

「嫌みですか？それとも皮肉？」

校長室の空気に怖じ気づく訳でもなく、秋馬は口から言葉を紡いだ。

「いやいや、感動しただけだよ。はい、給料」

ドサツと校長の手から紙束が落ちた。

床に落ちた紙には福沢諭吉が笑いもせず、虚空を見ていた。

「どーも」

秋馬はラケットバックにソレを入れた。

他にもラケットがラケットバックの中にあるようでカチカチ当たっていた。

「これからはちゃんと働いてね」

「分かりましたよ」

秋馬は手の中のラケットをラケットバックに入れ、校長を睨んだ。

「何だね？」

「別に」

「ああ、コレ」

校長から投げられた物を受け取る。
四角く、黒い携帯だった。

「仕事用だよ」

秋馬は「どーも」と言うと、校長室から出た。

四角い携帯は黒光りする。
ポケットに突っ込む。

「お疲れ様」

秋馬は声のする方を見る。

「大丈夫秋馬ちゃん？」

「ああ、大丈夫だよ」

「良かった」

知虎瑠は秋馬に抱き付いて嬉しそうに笑った。
秋馬はそんな知虎瑠の頭を撫でる。

「じゃあお金は貰ったし。仕事に行きますか」

「私も良い？」

おさげを揺らしながら知虎瑠は甘えるように頭を傾げる。

秋馬は笑った。

「駄目」

「意地悪ー。ぷー」

秋馬の答えに納得しない様子で、知虎瑠は秋馬の頭をポカポカ叩く。といつても、秋馬にとっては蚊が止まったような感じなのだ。

「秋馬ちゃん」

「何？」

知虎瑠はニヤツと笑う。

そして、強く抱いた。

「いつてらっしやい」

「うん」

この言葉に秋馬は幸せそうに顔を綻ばせる。

待つ者と待たせる者が居なければ成立しない言葉。

秋馬は思考に浸る。

私には、

居るんだね。
待ってくれる人が。

侵入、馬鹿な計画、破綻（前書き）

久しぶりなので長くしました。
まあ長いといっても三ページだけだけど。

侵入、馬鹿な計画、破綻

秋馬は面倒なセキュリティを潜り抜け、とある家に入る。

入った途端、ガシャンツと何かがセットされる音が秋馬の耳に投入された。

『チツ』と心の中で舌打ちをするとラケットバックから一つのラケットを取り出した。

闇の中に溶け込めないような程の蛍光色だった。

現段階、秋馬はとある物件の屋根裏に隠れていた。

真っ暗な中でも輝くラケット。

そのラケットは市販で売られているとは思えない。

色合いも勿論入るが、もう一つおかしい事が有るのだ。

ガットのの一つ一つの隙間が異常に狭いのだ。

一辺が1ミリ位しか無い。

何時も秋馬が使用しているラケットは人を殴る為に使用されているようなモノだが、一様そこらへんのラケットとは何も変わらない。色合い以外。

このラケットは何に使うんですか？と聞きたくなるような感じだ。

まあ秋馬が使うという時点で、

異常なモノなんだなと思わせるが。

秋馬は唇を舐める。

かさつく唇に後でリップクリーム塗らなきゃなあ…と思いを抱いた時、「誰か居るのか」と男の低い声が聞こえた。

『音声確保』と秋馬の耳元で声が出た。

『少々お待ち下さい』と女の声が秋馬の耳に響く。

秋馬の耳には丸い白い物を取り付けられていた。

『声紋の結果、現在無職の男、鈴木大地。銃器類の使用した経験は

無いと思われれます。ですが、声は落ち着いています。予測ですが、かなり計算高いです。鈴木大地はグループのリーダーだと思われま
す。以前の職業はコンピューター機器類の関係でした。今は倒産さ
れています。同僚の話ですと、五月蠅い、問題行動が多い、だそう
です。以上『プツンと音がした時には女の声は聞こえなくなっ
ていた。

使えない情報ども、と呟いた。

拳銃ねえ、と言ってから笑いが込み上げてきた。

楽勝だな。

拳銃なら、と笑うと隙間から覗いた目が男を捉えた。

ヘルメットをした男の服は如何にも犯罪者ですよ とでも言いそう
な黒く、防弾チョッキも着ているかな？と思わせる位膨らんでいる。

秋馬は携帯を開いた。

一件のメール。

【犯罪者、人質を確保したみたいだねえ。はい、データは此処に検
索】とあった。

その文の下には英語が並び、サイトを作り出す。

早く帰りたいと思いつつも、腰に有るモノを隙間から落とした。

丸いヘルメットの頂点が見えて、真上に居たので男はモノに当たり、
倒れた。

因みに、秋馬が落としたモノは 鉄の塊。

円柱の形をした鉄を何の躊躇いも無く落としたのだ。

男はピクピク痙攣していた。

その男の近くには拳銃が転がっている。

ちやんと考えて落としたから死にませんからー、と小さく呟いて先
に進む。

さっきの音に反応してか、犯人グループの動きは慌ただしくなる。

「NO.2?!大丈夫か!？」

二人の男が鈴木大地に駆け寄る。

『声紋確保』と声がした時には秋馬は動いていた。ラケットをバドミントンで言うロブの形を使う。

一人の男のヘルメットとそのヘルメットの所持者の男が宙に舞った。もう一人の男は啞然としていた。

『フリーター、原田圭介。以前暴力事件を起こし、お金1千万払い、無事釈放されました。以上』

「うわあああああああああああああ!!!」

まだ立っている男の悲鳴が響いた。

『声紋確保』と無情とでも言えそうな声が秋馬に届く。

秋馬はラケットのグリップの部分の腹にやった。

男は九の字に曲がる。

秋馬は今の感触的にやっぱり防弾チョッキ着用してるなー、と確認する。

『現在大手お菓子メーカーの社長、真田健一。事件が起こる3日前に行方不明でした。この男の緊張は頂点の為、何をするか予想出来ません』

「出来るだろーが」と秋馬は呟いた。

男はぎりぎり落とさないで所持していた銃を秋馬に向かって、乱射した。

秋馬はふんつと鼻で笑う。

そして、蛍光色のラケットで、全部の弾を撃ち返す。

バウンドした弾は男の防弾チョッキに当たる。

男の腹に衝撃のみが加わる。

弾のかえ方も分からないのか、弾切れの銃の引き金を何度も何度も押していた。

秋馬は笑って、

男のヘルメットに向かって、

ラケットを振りかざした。

ゴンッと鈍い音がした時には男は崩れた。

秋馬は近くにある二丁の銃に弾が入っているのを確認するとラケットバックに入れた。

さて、仲間の男の悲鳴を聞いて他の仲間も来るのかと思っていたが数分待つても音がしない。

冷静だな、と心の中で賞賛すると、階段を下っていった。

屋根にへばりつきながらだが。

人間技とは思えないが。

だが、そんな秋馬の足の裏には、【強力磁石】とかかかっている物がくっついている。

つまり、磁石の磁力によりへばりついているのだ。

此処で賞賛すべきは磁石である。

一つ一つ部屋の中を確認する。

最後の部屋に辿り着く。

秋馬はラケットを駆使し、ドアを開ける。

ゆっくりと。

端から見たら、ドアが勝手に開いている様に見える。

だが、誰も声をあげず、誰も確認しに来ない。

素晴らしいな、と頷く。

秋馬はさつき手に入った銃で廊下を撃った。

何回も。

ダダダダダダダ！と轟音のみが部屋に響いた。

だが、何の音もしない。

秋馬は流石に疑問を感じた。

人質の緊張度は高い。

だが、

人質が恐怖で震える音もしない。

そして、犯人グループの屑達が銃を構える音すら聞こえない。

秋馬は中に入った。

そして、

音がした。

後ろに。

「捕獲―
」

チャライ男の声が秋馬の後ろから聞こえる。

『声紋確保』と空気の読めない女の声もついでに聞こえた。

「来てもらおうかにやーん？」

『高橋治。銃器類の使用経験は無いと思われます。因みに、親族は娘のみです』

要らないなあ…と心底呆れつつも、秋馬は笑った。

「質問1。何処に人質は居るんですか？」

「言わないに決まってるんやろお？手を上げてねえ」

「質問2。貴方達は何人グループですか？」

「聞こえてるかにや？死ぬよ？」

ガチャリと銃が吠える。

秋馬は気にせず言葉を出す。

「質問3。人質は無事ですか？」

「じゃあ…それだけ答えてやるにやあー」

機嫌良さそうに言葉を吐いた。

「真田海斗はにや、ニヒヒ」

途切れさせ、また笑った。

人質の真田海斗。

真田海斗、大手お菓子メーカーの息子。

真田健一の息子である。

「お家だぜえ？つまり言うのだ、人質なんて最初から居ねえ。これはな、狂言誘拐。そして俺の目的を果たす為のモノ。そういや、アイツちよー叫んでたけど殺したの？サンキューね、悪役を演じてくれて」

高笑いする。

自分の計画が上手く進んでいる事に。

「じゃあ、もう一つ」

「うーん？」

「貴方、」

秋馬は振り返った。

そして、

ラケットを振った。
拳銃が意図も簡単に落ちた。
余裕の笑みが消える。

「死にますか？」

次の瞬間、
目の前は闇だけだった。
高橋治、
呆気なく敗れた。

「仕事終わり？」

『OKです。貴方の仕事は』

「で、このキモ男は何が目的だったの？」

『貴方が上で倒した真田健一の人生を壊すことだと思われます』

「つまんなさそーだな。じゃあ帰るよ？」

『構いません』

秋馬はラケットを仕舞うと脚を動かす。
今日の仕事は終わった。

だが、

事件が無い日は無い。

何故なら、

私達が、

人間が、

居るから。

後始末の説明 (前書き)

はい、

長い間待って下さってありがとうございます。

まあ今回も期待しないで下さい。

てか期待する人居ないだろーけど。

後始末の説明。

早朝。

爽やかな風が流れる。

「知虎瑠ー、パンある？」

眠たげな目を擦って秋馬は欠伸を零した。

「はい、黒白あんパン」

知虎瑠はポイツと軽く投げる。

「んー、変なあんパンの名前だね」

はあと溜息を吐いて秋馬は知虎瑠を見た。
当の本人はんっ？と頭を傾げる。

「仕方が無いじゃんー、だってお父さんたちの仕送りのパンだもん」

ぷくつと頬を膨らます知虎瑠。

そこら辺の家をシェアしている女の子達、にしか見えない異常ではない会話

だが、

ニコリと笑ってパンを口に含む少女は昨日数人の男達を殴り、
血で服を汚さないようにしながら帰宅した、

人間。

いや、

異常者。

そして、

その少女に笑いかける少女は、

その少女が好き。

人の血を見て服を汚したくない、と思う少女を、

好きなのだ。

これこそが、異常。

いや、

これこそが、人間、と言った所か。

「ねえ秋馬ちゃん」

「何？」

知虎瑠は椅子に座ってテレビを優雅に眺める秋馬の腕に絡まった。

「昨日の馬鹿話の説明の続きをして」

馬鹿話　とは昨日あった狂言誘拐である。

「良いよ」

秋馬は最後の一欠片を口に放り出す。

口は機械的にあんパンを噛み、

粉々にしていく。

唾液に塗れる事によって更に甘く感じるあんパンを喉に通した。

「アナウンサーが中途半端にしか教えてくんなかったから勘だけど、アレ、メンバーの一人の人生を壊す為って言ったじゃん？」

「うん」

興味深そうに知虎瑠は頬を染めて元気よく頷く。

「わざわざあんなに面倒な事したと思う？」

「うーん…馬鹿だったから？」

知虎瑠は分かり易く頭を傾げて手を広げる。

手に負えない、というアピールを受けた秋馬は溜息を零した。

「あの…名前忘れたから人生を壊そうとした奴はタローって言うな？壊された方はジローで」

「あいさつ」

「ジローと奥さんの子供…つまり偽人質は本当はタローと奥さんの子供。だけど、タローと奥さんは結婚出来なかった。まあありきなりに言えば両親とかのせいかで、両親は勝手にジローと奥さんを結婚させる。んで、タローはジローが憎くなる。多分、結婚してから子供が産まれたからジローは気付かなかった。自分の子供じゃないって。タローは奥さんと子供にたまに会うので頑張って自我を抑えていた。まあでも耐えられなかったんだろ？最初は殺害のつもりだったけどタローは考えたんだ。自分の子供が人質となってしまう、ジローが苦しむ。なんとも楽しそうなモノだ。そうだ、ついでにジローを犯人グループの一人としてやればもっと楽しくないかってね」

ふう、と秋馬は一息。

「でもさあ、狂言誘拐って難しくない？しかもお父さんだよ？子供を取った犯罪者達と何かしらしたく無いよ」

秋馬にブー知虎瑠は非難の声を。

「知虎瑠、人間ってのは馬鹿なんだよ？」

「んにゃっ？」

秋馬は知虎瑠の頭を撫でる。

椅子に座らず、床に座っていた知虎瑠は頭を傾げる。

「簡単だよ、とある大手企業の子供を守る為に働いて欲しいってな」

「幾ら馬鹿だからって無理だよお。そこまで屑が居るっ？」

気持ち良いように撫でられっぱなしの知虎瑠は猫撫で声で言う。

「きつと人質を攫った犯罪者ってか敵にやるように言われたんじゃない？」

「人間ってのはそんなモン？」

最後が適当な説明に知虎瑠は頬を掻いた。

「そんなモンだよ」

秋馬は笑って天井を見上げた。

「人間ってのは雑草よりも無様なんだから」

そんな2人が居る家をジッと見る人間が居た。

「待ってる……」

低い声が家に向かって放たれる。

その人間はスウと空気のように消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5970t/>

黑白国家

2011年11月16日14時09分発行